

今西学派の系譜

—いわゆる今西学説の発展をめぐる一考察—

大串龍一

I まえがき

II 今西学説の三つの柱

- 1 学説と学派
- 2 生物共同体構造論（すみわけ理論）
- 3 動物社会論と人間社会の生成
- 4 進化論と生存競争説批判

III 今西学派の形成と発展

- 1 いわゆる今西学派の問題
- 2 京都の生態学とその変遷——今西学派の第1期——
- 3 登山と探検——第2期——
- 4 サルの社会の中へ——第3期——
- 5 今西学派の消滅と進化論——第4期——
- 6 おわりに

I まえがき

日本の科学ジャーナリズムあるいはそれに近い人たちの間で、すみわけ理論あるいは今西理論ということばが聞かれることがある。それは主として生物学（とくに生態学）にはじまり、生物社会学、人類学そして進化論の分野で論じられてきた。そうして最近は、とくに柴谷篤弘氏の評論活動によって科学論あるいは自然論の形で話されることが多くなっているように思われる。しかし一方、自然科学の諸分野で現在活発に学問活動をつづけている人たちの多くは、このような今西理論とかすみわけ学説とかいったものを、ほとんど取上げることがない。この学説の推進者であり、その名を冠せられている今西錦司氏は、1979年に文化勲章を受章し、日本の学界の最高権威のひとりとして自他ともに認められている。当然、その建設した学説なり理論はわが国の、あるいは世界の指導的理論として、その出身分野である生物学なり人類学の中心になっていると、一般社会の人たちは考えるであろう。ところが、学界の中ではその学説はほとんど無視されていて口にのぼることもない。あるいは時たまこのことばだけが皮肉なニュアンスをこめて話され、その内容について論じられることはほとんどない。これは日本の学界の体质の問題なのか、あるいは学説の方に問題があるのか。

学問活動とその社会的反響は、大学において学問に従事しているものにとっては、常に关心を持ちつづける重要な問題である。今西学説あるいはそれをつくり出したいわゆる今西学派というものが日本の学問と社会の中でどのようにあつかわれているかということは、この問題についてひとつの興味あるモデルを提示しているといえよう。筆者は自らの専門分野である生物学、とくに生態学と生物社会学を進めてゆくさいに、折にふれてこの今西理論あるいは今西学派に関係のある問題にふれ、考える機会があった。そうして、日本の科学史の一つの面として日本におけるいわゆる今西学派といわれているものの実態と、その貢献あるいは問題点を明らかに

しておく必要を感じてきた。筆者は科学史を専攻するものではないが、自分の学問の位置づけをはっきりさせる上からも、この問題を検討してみたいと考えた。

同時に、筆者には今西学説あるいは今西学派に強い関心を持つもうひとつの理由があった。それは学生時代から今西錦司氏をはじめ今西氏周辺の人たちに個人的に接触する機会があり、書物や論文を通じてえられる知識のほかに、直接にこれらの人たちの学問に対する姿勢や、意見をある程度知ることができていたからである。私が接触したのは今西氏周辺の一部の人たちであり、また、その時期も限られている。しかし私の乏しい経験の中でも、この学派の実際のあり方については、私の持つイメージと、現在までにいろいろな科学評論あるいは報道にあらわれている姿とがくいちがっている所が大きい。

最近、柴谷（1981、1982、1984）や小原（1984）をはじめ今西学説について論じられたものがあいついで現われたが、これらの所論はジャーナリズムの一部の関心はひいても、大学や研究機関で進められている生物学や生態学の中心とは無関係のような印象を受ける。現代の生物科学の先端をめざし、日々めざましい前進をつづける世界の学界に伍してゆかねばならないところでは、いわば一種の言葉あそびのような今西学説は当面の役には立たず、や、極端な云い方をすれば、現代科学の進展についてゆけなかつた“落ちこぼれ”的研究者の自己満足の道具とさえも見られかねない。1930年代以来、主として京都大学を中心にわが国で独自の発展をしてきたこの学問とそれを進めたグループの人たちの努力を現代の学問の中に生かすにはどうすればよいか（現代の学問は、別に大学や研究所だけで進める必要はないとしても）、この問題を検討するために、先づこゝでひとつの試論をまとめることとした。

この問題を検討するために、筆者がまず準拠する資料は、この学派の中心となる今西錦司氏の著作である。とくに初期の『生物の世界』『生物社会の論理』『人間以前の社会』の3著書は、この学説の流れを理解する上で最も重要なものと思われる。

ここで、論考を進める前に、この学説あるいは学派の中心となっている今西錦司氏について名前ぐらいは聞いていてもほとんど予備知識を持っていない人のために、若干の解説をしておきたい。

今西氏についてはいろいろな解説が出ているが、その中では思想の科学研究会編の『人間科学の事典』（昭和26年）の中の『今西錦司』の項（担当執筆者梅棹忠夫）が、書かれた年代としてはやや古いが、それ以後の今西氏の活動も含めてその人物像をよくあらわしている。

これをかんたんに要約すれば、1904年京都に生まれ、旧制三高（現京大教養部）から京大農学部を出た。青年時代から登山家として知られ、国内での多くの初登頂、京大白頭山遠征隊の隊長など多くの業績をうちたてながら、研究者としては日本アルプスの森林帯、溪流の昆虫幼虫などの研究を進めた。壯年期は探検家として活動した。南洋ボナペ島、大興安嶺、蒙古などの植物群落をはじめとする自然の研究を行なった。これら豊富な自然観察にもとづく学説体系は伝統的な生態学者にはかならずしも受け入れられないが、植物、動物、人間と研究対象を変えながら生物的自然に関する巨大な理論体系を築いていった。

以上、梅棹氏の書いた人物像は今西氏の50才ごろまでの活動をあらわしている。その後について若干付記すると、京都大学理学部動物学教室から同人文科学研究所へ移り、再び理学部に転じて停年をむかえ、岐阜大学学長となり現在は退職して自適している。この間、ごく短期間農村社会の研究を行うが、まもなく有名なニホンザル研究が始まり、それはアフリカにおけるゴリラ、チンパンジー研究に発展する。この間、2回にわたるヒマラヤ、カラコルム遠征がある。その後は国内における登山活動とともに、進化論に関する考察を発表して社会的に多くの

反響を呼んでいる。

今西氏はその個人としての仕事と同時に、非常に広い人脈を持ち、とくに生物学、人類学の方面で氏の周囲に集まった人々は今西氏の強い影響を受けると同時にそれぞれの個性を持って活動し、それらが全体としていわゆる“今西学派”といわれるひとつのグループを形成していると考える人も多い。それは人文科学の方面における桑原武夫氏などを中心とするいわゆる“京都学派”（これにもいろいろな見方があるが）と並んで、日本の学問の世界における独得の存在と認められている。

この論文では先ず、今西学説に関する検討の第一歩として、学界や社会でしばしば取上げられるながらその具体的な内容があいまいなままで残されている今西学説と今西学派というものについての、筆者の判断するところをまとめる。柴谷氏は筆者が先年発表したすみわけ理論をめぐる考察（大串 1981『水生昆虫の世界』東海大学出版会）について、ダーウィニズムとすみわけ理論の間の問題点に正面からとりくんでいないと批判した（柴谷 1982、『私にとって科学とは何か』朝日新聞社、167—170頁）。筆者はかねてからこの問題について論じる時がいつかはくると考えて、当面の研究のかたわら、その準備作業を行なってきた。この論文も、その準備作業の一部である。

なお、以下の章においては文章を統一するために、引用する人名には一切敬称をつけないことにとする。ここにあげる多くの人達はすべて筆者の尊敬する先駆あるいは畏友であり、直接あるいは間接に多くの導きを受けた。生態学の研究者として私が今日あるのは、全くこれらの人達のおかげといってよい。その敬意と感謝をこめて、ここでは一切の敬称を省かせて頂くこととする。

II 今西学説の三つの柱

1 学説と学派

すみわけ理論とか今西学説とかいっても、特にこの問題に関心のなかった他の学問分野の人たち、あるいは一般社会の人たちにとっては何のことか分らないと思われる。しかし、元来この学説は特別の学問的修練や予備知識なしにもかなりよく理解できる面を持っており、ジャーナリストや文学者の中にもかなりの、いわば“ファン”を持っている。逆にいえばそれ故に専門家の集まりである学界の中では素人向けの思いつきのように感じられて、無視されることが多いのである。そうして、またこの説自体が、今西が近年は“自然学”といったりしているように自然科学の特定の一分野にとじこめられないものといえる。筆者がこの一考察を、この一般社会と大学の結びつきをめざす大学教育開放センターの紀要にのせることを意図した理由もここにある。

この考察をすすめるに当って、先ず問題を整理しておきたい。実はこれまでの今西学説をめぐるさまざまな評論が、とかく論者の一人合点のようになってしまっていっこうに他の論議とかみ合わず、前進しないように見えるのも、そのひとつの原因はここにあるものと考えられる（もうひとつの原因としては、これまでの論考の中には読者層が非常に限られた刊行物に発表され、この問題に関心がある者にとっても、検索したり読んだりする機会がないという事情が考えられる）。

筆者は、ここでは問題を下記の二つにわけて検討する。

(1) すみわけ学説（ここではまず今西学説あるいはすみわけ理論等と呼ばれるもの全体をさす）の検討

(2) 今西学派と呼ばれるものの検討

ここでまず、ふつう今西学説といわれているものを検討してみよう。

最初に問題になるのは、これまでのさまざまな論考の中で、このより方がいろいろな内容のものをさしていたことである。すみわけ学説というのが今西学説の全部なのか一部なのか、というような問題についてもはっきりした検討がなされていない。

ここで筆者は、とりあえず一般に今西学説といわれているものはつきの3つのものを含んでいると考えたい。

2 生物共同体構造論（すみわけ理論）

第一は主として生態学の分野に関するもので、自然の生物群集（あるいは生態系）の構造論である。自然の生物群集、草原や森林あるいはとくに今西がその学説を構築する上で最も力を注いだ溪流にすむカゲロウ幼虫の群集の構造解析に関するものである。生物群集 Biotic Community を今西ははじめ生物共同体と云い、のちに生物社会と呼んで、それまでの群集生態学で云う生物群集と区別している。この生物群集が種社会 specia を単位として成り立ち、それが生活形のよく似たいくつかの種社会の集まりである同位社会 synusia をつくり、同じ地域に共存しながら生活形をはっきりとちがえている他のいくつもの同位社会と一緒にになって複合同位社会をつくる、といった重層構造を持っている。今西は近年（1983、1984）この生物的自然の基本構造を種個体 specion、種社会 specia、生物全体社会 holospecia の3段階にまとめ、さらにそれらを包含する生物—無生物環境をあわせた geocosmos を想定している。これが今西の『自然学』の考える自然である。このような生物群集の構造の中で、ひとつの同位社会の中に含まれるいくつかの種類が、形態（個々の動物や植物の外形）でも、生活内容（すみ場所や栄養のとり方など）でも非常によく似ているが、わずかにすみ場所の選好傾向をちがえていることによって少しずつ空間的にずれた生息場所にすんでいる現象が有名なすみわけ現象であって、多くの解説書や一部の教科書にも引用されている。ただし、これはすみわけ現象の一部であって、同位社会の中における種社会のすみわけである。この次のレベルの問題としては、複合同位社会の中で、それぞれによく似た生活様式を持つ種類がいくつか集まった同位社会どうしが、生活空間なり生活内容をちがえることによって共存していることもまた、同位社会のすみわけであり、さらにこうした何段階もの同位社会が重層的にみ上げられた高次の複合同位社会（生態系といってよい）が地球上の大きな地域を分割している現象（たとえば砂漠と草原、草原と森森が自然地理学的にみて地球表面の陸地を大きく分けているように）もまた、これら高次複合同位社会のすみわけである。これが、これまで考えられたようにある種類、あるいはある生物群集が競争によって他のものを追い拂うことによって生じたのではなく、もともと一つであったものが地球上の環境の多様化とそれに対する利用のしかたを変えることによって多数の種に分かれて、成立したのであるというのがすみわけ学説の骨子である。今西が、有名なアメリカの植物生态学者であった F. E. Clements の遷移学説をひとつのターゲットとして、植物群落や動物群集の中で種類が次々に入れかわって行って最終的にひとつの安定状態に達するというこの自然群集の遷移 succession の現象を、別のより広い見方で説明できないかと考えて、自分の専攻したカゲロウ幼虫の生息環境と群集構造の研究をつうじてすみわけ学説を大成したことは、今西の『生物社会の論理』にくわしい。すみわけ理論イコール今西理論と考えられがち

であるこの基盤はここにある。

ただし、すみわけ理論とは今西の創案になるものではないという説は時々みられる。ひとつは欧米、とくにアメリカの鳥類学者 E. Mayr の Habitat segregation 説がすみわけ説と同じものだという意見で、これは誤りであることは明らかである。Mayr の説は系統的にごく近縁の種類どうしが雑交を防ぐために空間的分布をちがえている現象についてであって、自然の生物群集構造に関するすみわけ理論とは全くちがっている。もうひとつの説は、すみわけ理論は今西と同じ研究グループに属し、同じように河川の底の昆虫群集を研究した故可兒藤吉の提出したものであるという説である。これは今西と可兒の思想的背景あるいは姿勢のちがいを重視する人たちによってかなり強く主張されたものであるが、どちらかといえばあまり重要でない枝葉の論議のように思われる。これはすみわけ学説と一般に呼ばれているものが、今西個人の創案というよりも、ひとつの研究集団の共同の産物であって、もちろんその中には今西の強い個性が反映しているとしても、個人に帰すべきものではないと考えられるからである。

3 動物社会論と人間社会の生成

今西学説の第二にあげられるものは生物社会学の分野におけるもので、ニホンザルの社会の研究が有名であるが実際にはその前の半野生馬の社会研究に始まる。人間社会生成の基本的問題の解明をめざして動物の社会を研究することは、現在ではそれ程抵抗がなくなったが、1940 年代の終りにこの研究が始まった頃には社会的にいくつもタブーをおかす事であって相当の勇気を必要とした。とくにその中で動物個体の個性の重視と動物社会の中における文化的伝承の重要性の指摘は今西氏の天才的といつてもよい直観に負っており、その後 30 年以上の世界各国の研究がそれを追認したものである。

この分野は今西のさきの“すみわけ学説”と別個のもののように見える。そのために、人によって今西とその学説について全くちがったイメージを抱くようになってしまふこともある。しかしこの二つの分野は、生物の世界の基本単位を種社会におくという点において密接に結びつけられており、決してちがった 2 つのものではない。一方では種社会を単位としてそれを同位社会、複合同位社会と積み上げて地球上の生物界全体の構造と成り立ちを把握してゆこうとするのであり、もう一方では個々の種社会をその構成単位である各個体の集まりとして、各個体のちがいを基礎とした社会構造——これが究極的には人間の社会にもつながる社会構造——の解明をめざしたものである。そのためによりあげられたのが個体識別という方法であった。これが研究のはじまった当初は動物学界ではほとんど認められず、むしろ嘲笑を受けたが、現在では世界的にみてほとんど不可欠の方法となってきた。それはサルのような行動内容の複雑ないわゆる高等動物だけでなく、他の哺乳動物、トリ、サカナ、そして昆虫をはじめとする多くの無脊椎動物に至るまで用いられて、多くの新発見をもたらしてきたのである。

今西はこの分野ではその後の研究方向をさし示した点ですぐれた研究指導者であったが、直接に研究に従事して日本をはじめアフリカ、アジア、南米の各地で大きな成果をあげたのは伊谷純一郎をはじめとする当時の若い研究者であり、また、そのマネージャーとして国内におけるサル研究の体制をつくり、あるいはそれを海外に紹介する努力を惜しまなかった今西氏より年長の宮地伝三郎であった。

4 進化論と生存競争説批判

今西学説の第三のものは進化論の分野である。ここ数年、今西がいろいろな形で社会や学問

の世界の注目をあびるようになってきたのは、主としてこの進化論の分野における発言によっている。それはダーウィンの進化論（進化要因論）の中心となっている生存競争と自然選択の学説に反対して独自の理論を立てたためと解説されていることが多い。

今西の進化論は、前述の生物群集構造論と種社会構造論の集大成であり、その中心となるのが競争ではなく非競争の共存論である。ただし、生存競争と自然選択に反対した進化学者はこれまでにも世界的に決して少なくはない。ここにこの点だけをもって今西学説を持ち上げるわけにはゆかない。今西のこの分野における特長は、よく引用される“生物は変わるべくして変わった”という一種不可知論のような獨得の自然観を背景としている点にある。このため、今西の進化論は従来の自然学者の理解をこえる所があり、今西にずっと関心を持ちつづけてきた若い研究者の中にも、最近の今西の説にはついでゆけないと云うものが少くない。また、このような今西の云い方が、別の方面でこの学説のファンを増やしているという事実も否定できない。しかしこの非科学的ともみえる考え方が、一方では分子生物学と集団遺伝学を確固たる基盤と考えて進み、世界の学界の進化論の主流となった、いわゆるネオ・ダーヴィニズムが本当の進化を説明しえないのでないかという疑問を持つ研究者の増加とともに、あらためて人々の関心をよびおこしたようにも思われる。

III 今西学派の形成と発展

1 いわゆる今西学派の問題

いわゆる今西学説の成立と展開を考えたとき、それを支えた今西周辺の人たちのことを考えないわけにはいかない。この学説の成立にあたっては、今西個人の強烈な個性と直觀力が不可欠であったと思われるが、同時に、今西ひとりでは恐らくそのアイデアは個人の幻想に終ったであろうと思われる。もちろん、どのような学説についても、何らかの形での協力者なしには成立しえないのであろうが、今西の学説のばあいには、この協力関係はより重要なものであったように思われる。このように密接な協力関係のゆえに、いわゆる今西学派あるいは今西グループというものが存在した、あるいは今も存在しているように云われていることがある。あとでのべるように、それはかなり誤った見方を含んでいると筆者は考える。

いわゆる今西グループのかたちや活動のようすを一般の社会に紹介したものとしては、少し時期的には古いものになるが、藤田信勝の『学者の森』（下）（1963、毎日新聞社）の一節“社会と文化の起源を探る”（同書 165—227 頁）や、草柳大蔵の『京風“類猿人”・今西錦司』（文芸春秋、昭和 45 年 12 月号、146—159 頁）がある。この他、一般新聞や雑誌に紹介された短文はいくつかある。これらのジャーナリストの文章は、学界の外にいる多くの人たちに興味深く今西グループの実態を伝えている（専門の立場からみれば明白な誤りもいくつかあるが）。そうしてここに記述されている時期の昭和 30 年代から 40 年代初期より以降になると、それまでのような学問の推進のための集団としての今西グループは次第に発展し分化して、このような今西個人の名でまとめられる域をこえてしまい、その実体は消滅して、どちらかといえば今西をめぐるファンの集まりのような形に転化していったように思われる。

ここで、前章でのべた今西学説の三つの柱と対応させながら、この学派あるいはグループの人たちがどのようにつながりを持ち、変化していくかを、筆者の考えているところにしたがって整理してみたい。これは将来、この学説の歴史をたどる研究者にひとつの手引を提供することをめざしている。

この系譜をまとめるにあたって、あらかじめいくつかの点をことわっておきたい。

その第一は、これが主として筆者の専門に近い生物学の範囲をとりあげたことである。いわゆる今西グループには、この他に主として登山を通じて形成された広い人脈があり、それが学界だけでなくより広い社会の各方面にひろがっている。ここにはいわゆる“学派”と“グループ”というものの境界がはっきりしないし、今西のこの方面的活動がまたその学説形成と無関係ではない。

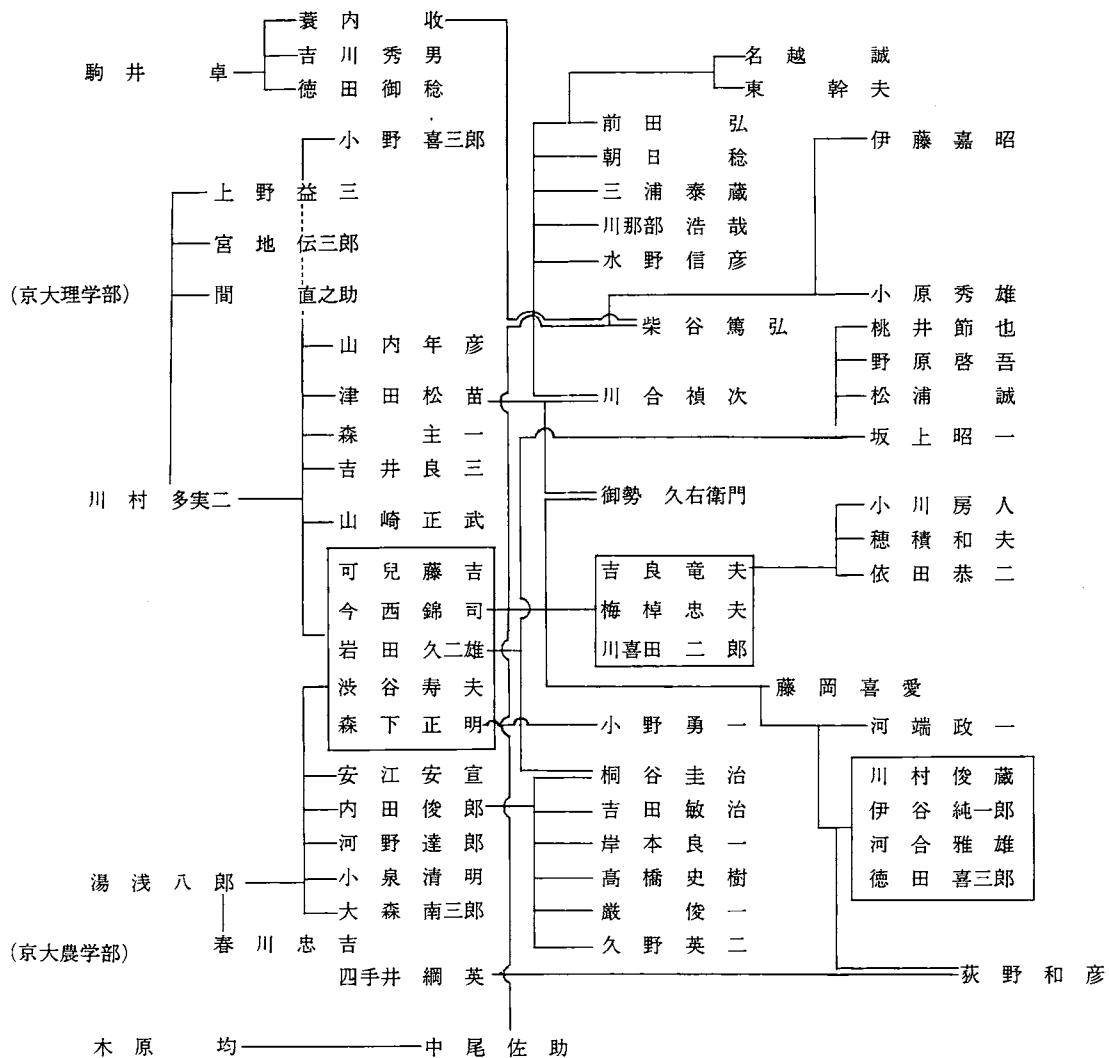
第二に、この系譜は学派というよりはむしろ、さまざまな形で影響を与えあった人たちのつながりを示したものであって、個人的には、時期によっては今西と対立するような考え方を持った人も含めている。またその研究の方向や考え方あるいは今西氏との個人的な関係から今西グループと周囲から見られていても、自分は今西グループではないと主張する人もあるだろう。これには三つの問題がある。ひとつは京都の生態学というものと今西グループの関係である。しばしば京都の生態学グループは単一のまとまりのようにみられるが、いわゆる今西学派の形成と確立の時期である1940～50年代には京都の生態学研究には三つ（見方によれば四つ）の中心があり、そのひとつが今西グループであったといえる。他のグループとの間でも研究上の意見の交流は行なわれ、協力もおこなわれた。そのため、どのグループに属するともはっきりしない研究者も少なくなかった。元来、これらのグループはそれ程拘束力の強いものではなく、たとえば大学の講座を基盤としたグループ（たとえば宮地グループ）であっても、はっきりと任務分担のある共同研究の遂行中でなければ参加離脱は自由であった。この事については靈長類社会の研究に関して後述する。もうひとつの問題も前記のことと関係するが、しばしば考えられるような学派というものとちがって、今西グループは、ひとつの学説を柱にして集まった同じ専門の人たちの、強い永続的な集団ではなく、むしろいろいろな専門と性向を持った人たちが、その時その時の関心によって集まつたもので、かなり自由に集合離散する面があったということである。その点で強い団結を持つ一種の相互扶助集団である学閥とちがっている。いいかえれば、今西グループに限らず当時の京都の生態学の各グループのメンバーの人間関係には、よく云えばお互に各自の自主性を尊重する、別の見方をすれば協力の必要がない時にはお互に冷たくつき放すような印象を受ける面を持っていた。

以上のことと前提として、表1に示したような研究者の系譜を説明する。

2 京都の生態学とその変遷——今西学派の第1期——

日本の生態学は、生理学や分類学からはなれて独立した学問としての地位を得たとき（大体昭和初年とみてよいであろう）、大きくいって二つの中心を生じた。そのひとつが京都大学の動物生態学である。この京都の動物生態学がまた二つの中心を持っていた。川村多実二にはじまる理学部動物学科の生理生態学講座と、湯浅八郎にはじまる農学部農林生物学科の昆虫学講座である。この二つの研究室（講座）は、その後対照的な進み方をした。昆虫学研究室の方は湯浅の下で多様な研究を展開したが、湯浅のあと春川忠吉、内田俊郎と教授が交代してゆくとともに、次第に研究対象とテーマをせまい範囲に集中してゆき、その集中した力で日本における実験個体群生態学を確立するとともに、日本の生態学が世界の水準を抜くことをはじめて示した。これは広い視野と柔軟な思考を持ちながらも研究対象と方法をきびしく限定した内田の方針の成果である。一方、動物生態学研究室の方は、川村から次代の宮地伝三郎へとひきつがれたが、その方針によって当初からかなり広かった研究対象と方法はますます広く、自由になつていった。そのために極端な見方をすれば研究室としての方針も特長も把握しにくくなり、そ

表1 今西学派を中心とする研究者の系譜



注) 表が複雑になるのを防ぐため、人名はかなり少なくしてあり、重要な人名でもこの論考に関係のうすいものは省いた。

出身大学・教室等とあまり関係なく、また、上下・左右の排列は必ずしも年代順によらない。同じような専門のグループにまとめて、図中の空いた所へはめ込んである。

□ 内がいわゆる今西学派の核心部分である。

の学問レベルについても客観的評価が困難なほど多様になった。競走馬の表情の研究という独得のテーマを専攻した間直之助が在室できたのもこのような方針のおかげといえよう。今西はこの初期の昆虫学研究室に入り、湯浅の去ったあと川村の動物生態学研究室に移った。つまり、ひろく自由なテーマを選べる場所を選択して動いたことになる。昆虫学教室出身の岩田久二雄、可兒藤吉、森下正明、渋谷寿夫はいずれもこのコースをたどっている。今西を含むこの五人が最初の今西グループを形成したといってよいだろう。今西学説の第一の中心になる“すみわけ理論”はこのグループの討論の中から生まれた。1930年代の後半から40年代のはじめにかけてである。これが発表されたのは今西の学位論文（英文、1941年）および著書『生物の世界』（1941）と、可兒藤吉の論文『溪流棲昆虫の生態』（1944）であり、集大成されたのは今西の『生物社会の論理』（1949）である。可兒の遺稿としてまとめられた『木曾王滝川昆虫誌』（1952）もこの問題の重要な文献である。この“すみわけ理論”的原典を今西のものとするか可兒のものとするかについて、今西のプライオリティを認めない立場をとる研究者もある。そのため“すみわけ理論”を“今西理論”とよぶことには若干の問題は残っている。

この時期のグループは、今西の同年輩かわずか年少のものの集まりであり、いわば同格の討論グループの色彩が強い。経歴が似ているだけでなく、そのほとんどの者が中年まで定職につかず、“浪人”として研究に専念した（アルバイトはしていたが）ことも特長といえる。更にこのメンバーのテーマは、すべて昆虫を取上げていたがかなり分散していた。カゲロウ（今西）、ブユ（可兒）、カリバチ（岩田）、ハナバチ（渋谷）、アリ（森下）と材料がちがい、方法もちがっていた。いずれも野外で研究を進めていたが、今西のように本格的な登山家は一人もいない。このようにひとりひとりが異質の、独立した個性を持った研究者の集まりの中でその後の今西学説の基礎ができたものと思われる。この今西グループの最初の核心をなしたメンバーのうち、可兒はよく知られているように太平洋戦争で戦死し、渋谷は戦後は徳田御穂と共に別の方向へと生態学を推進した（これが、今西、宮地、内田と並ぶ京都の生態学の第四のグループといえよう）。岩田はカリバチの比較習性学を大成し、個人として集まってきた多くの弟子を育て、坂上昭一をはじめとするハチの比較社会・生態学は世界でも注目されている。森下はアリの研究と同時に日本の数理生態学の中心となった（筆者は中学生時代からこの岩田の個人的指導を受けて生物学に入った）。

3 登山と探検——第2期——

1940年代に入ると、太平洋戦争のために分散した最初のグループに代って、今西の周囲に第二のグループが形成される。それは戦前の登山家としての今西をしたって“入門”した京都の中学生が大学に入り、今西の学問の弟子となったからである。ほとんど同じようなコースを進んだ3人の学生が、今西学派の第二の核となる。吉良竜夫、梅棹忠夫、川喜田二郎である。国内の登山に、そしてポナペ島や大興安嶺の探検に、影と形のように今西につき従ったこの三人が、それぞれちがった分野、植物生態、動物生態、人文地理へと進んで、すみわけ理論の植物、動物、人間への適用に貢献する。とくに今西がカゲロウ幼虫のすみわけをもとに考えた理論の動植物一般への適用が行なわれ、すみわけ理論がここに完成したといってよい。川喜田、吉良の温量指数によるアジアの植生分布の体系づけはその成果であり、さらに、のちになって日本の人文科学に各種の影響を与えた梅棹の『文明の生態史観』（中央公論、1957年2月号）もこの理論の発展と考えてもよいであろう。

吉良、梅棹、川喜田という今西学派の第二期のピークをつくった三人が活躍したのは、大戦

末期から敗戦後の 1940 年代である。この三人が戦後できた新制大学に職をえてそれぞれの分野での弟子を育てるようになり、今西のもとを去った。若い有能な協力者の去ったあと、一人で学問を続ける淋しさを、今西は『生物社会の論理』初版のあとがきに書いている。

その後のこの三人の活躍は社会によく知られている。第一期の協力者はその後は大学の研究室にとじこもって個々の立場で学問を進めたが、第二期の三人は学問の面はもとより、対社会的活動が目ざましい。国立民族博物館長として、また社会評論家としての梅棹の業績、専門の人文地理学よりもむしろ発想法（K J 法）の創案や移動大学、あるいはネパール山村の自立援助活動などの川喜田の仕事と、それらにくらべて地味ではあるが日本の生態学会の中核として、また、琵琶湖研究所長として国際湖沼環境会議など幅広く活動している吉良と、いずれも単に学問の世界にとどまらない活動は、日本の社会に大きな影響を与えていた。一見、自然の観察と抽象的な概念操作にみえる今西学派の学問と、そのメンバーの社会に与えるインパクトとの関係は、十分に検討する価値がある。

4 サルの社会の中へ——第 3 期——

今西グループの第三期の中核をなすのは 1947 年に始まる今西のニホンザルの研究に加わり、その後の靈長類学推進の中心となった、その当時まだ学生であった川村俊蔵、伊谷純一郎、河合雅雄、徳田喜三郎の四人である。

この四人はいずれも京都大学の理学部動物学科の学生のときに今西グループに入った。その入るきっかけはいろいろあるようだが、第 2 期のメンバーの梅棹らのように登山を通じてまず今西と結びついたのではなく、むしろ人間とは何かという疑問が基本になっていたように思われる。敗戦直後の社会と価値観の大変動の時代を 20 才前後の感受性で体験したことが大きく影響しているものと思われる。

この四人は学生時代、それからそれぞれに大学院（旧制）へ進みあるいは就職（大阪市立大学、和歌山大学、兵庫農科大学）しても、京大の理学部動物学教室生理生態学研究室を足場として活動した。山の中のサルやシカを追いかけることが学問であるなどと考える人のほとんどいない当時に、かれらが大学の講座を足場として活動できたのは、大学の中で生じるさまざまな問題からかれらを守った、当時の生理生態学講座の教授である宮地の陰の力によるものと考えられる。こうして今西グループのメンバーに学生あるいは研究員として身分上の保証を与え、元来は水生動物学を主流とする講座の中にこのような異質のグループが育ってゆくのを見守り、さらにその成果を国内各界から海外まで紹介するのに努めたことは、宮地の包容力と、学問の将来に対する見識を示すものであろう。それは巣の中にホトトギスのひなという鬼子の育つのを見守り、哺育するウグイスの親鳥を思わせるものがあった。

ニホンザルの研究はその初期三年ほどの暗中模索の時期をのりこえて、幸島および高崎山における餌づけの成功とともに、ようやく学問としての軌道にのった。しかし日本の動物学会の中では学問と認められない時期が長く続いた。学会の全国大会では、多数の発表の中には奇想天外な話をする講演者がいつも一人ぐらいいはいるものだが、当時の靈長類研究グループ（今西グループ）の発表もそのように受取られていた。その矢面に立ったのは主として伊谷だった。筆者は当時京都大学理学部の学生から大学院（新制）へ進んだところであったが、その頃、同じ動物学教室の実験形態学研究室にいた岡田節人（現在は世界に知られた分子生物学者になっている）から、伊谷らの研究が本当に科学としての将来性があるのかという真剣な質問を受けたことがある。不毛の道へ迷い込んで一生を誤るのかもしれない友人を心配しているような岡

田の聲音を今も思い出すことができる。このような空気の中で、當時まだ20才台のこの4人がくずれなかったのは、本人の資質もさることながら、リーダーとしての今西の學問的なあるいは人間的な力量の並々ではなかったことを示している。とくにその當時今西は指導教授というような身分上の強制力を持たず、いわば部外の一共同研究者としてこのチームをまとめていたのだった。この点、この今西グループの第3の中核になった4人は、靈長類研究グループの成果が世界の注目を受け、学界における地歩を確立してから参加してきたその後のメンバーとちがっている。

靈長類の社会と心理の研究が世界的に大きな盛り上りをみせたのは1960年代である。その理由は別に重要な考察の対象となるが、この世界の流れを先取りした今西の見通しは、この学派の學問的実力が世界の水準を、とくに理論面において抜いていたことを示すものといえる。その力が1940年代の世界の学問から隔離されて孤立した二次大戦前後の日本で生まれたことは注目に値する。

5 今西学派の消滅と進化論——第4期——

靈長類学におけるこの今西グループの活動は1960年代をもってひとつのピークをこえる。もちろん、日本の靈長類学も、この4人の研究者の活動も、その後さらに大きな発展をしてゆくが、それはもはや“今西グループ”などという形ではまとめられない。その中でこのメンバーもそれぞれのめざす方向にしたがって、川村は主にサルの動物学的諸問題の解明をめざし、その活動の場を熱帯アジアに求めた。伊谷はサルから人類生態学を、川合はサルの社会学を指向してアフリカを舞台に活動をつづけ、60才前後の現在でも若々しい野外研究を進めている。1984年11月、伊谷が英国人類学会よりハックスレー記念賞を受けた。翌12月、京都においてその受賞記念会が開かれたが、300人以上の参加者を集めた盛大で華やかな会場の中で、筆者は30余年前の日本動物学会で、ほとんど無視され、嘲笑さえ受けていた伊谷の最初の研究発表を思い出して、学問の流れというものについて感じることがいろいろとあった。

今西はその席上、祝辞をのべたがそれは聞きようによつては伊谷の研究方向についての批判ともとれるものだった。すでにここ10年以上、伊谷はじめかつてのグループの人たちと今西はそれぞれ独立の道を歩いていることは、この分野の学問に注意している者にはわかっていた。

日本の靈長類研究が大きく発展し、日本モンキーセンターと京都大学靈長類研究所が発足して研究者が公的に認められ組織されてきたのと平行して、今西はその研究からはなれてゆく。そうして一人で進化論に関する考察をすすめてゆく。それから順次発表される論考が、現在しばしば社会的にとりあげられる“今西進化論”である。かつての今西の“すみわけ理論”がClementsの単極相的遷移学説をターゲットとしたように、この進化論は進化の要因としてのDarwinの自然選択説をターゲットとしている。

進化論の問題に集中するようになってからの今西には、かつての同志として共に学問を建設しようという“学派”あるいは“グループ”といえるようなものは形成されない。今西の書いたものにひかれて教師または反面教師として学び、あるいは祖述しようとする“ファン”と、今西が停年退職後再び熱情を傾けるようになった登山を共にする中で學問的な影響を受ける研究者が今西のまわりに集まる。伊藤嘉昭(時代はかなりさかのぼるが)や小原秀雄あるいは“自然の会”的メンバーは前者に、荻野和彦のような人々は後者にぞくする。いずれも現在、あるいは今後の学問の重要な推進力となる人々と考えられるが、もはや“今西学派”という名称とは無縁の独立した研究者である。

ここでいわゆる今西学派あるいは今西グループというものの基本構造がわかってくる。今西を中心にして少数のすぐれた資質を持つ研究者が集まって、数年～十数年にわたって共通テーマを持って学問を進め大きな成果をあげるが、メンバーが成長あるいは研究が認められて公的に地位を持ちあるいは研究組織が整備するとともに解散して各自ががそれぞれの道を歩き出し、今西はひとりになって、また、新しい小グループをつくってその中心となる。こうしたグループの形成、発展、解散のくりかえしである。こうしてみると、ひとつのグループが長年月かけて次第に発展し、公的に認められる地位を獲得し、組織を大きくしながら永続してゆこうとする、ふつうの“学派”とは大きく異なっている。この点で“今西学派”というものは有って無いようなものともいえる。ただ、その生成一分解の過程で1回ごとに大きな学問的成果を残してきたのである。

この、発展した大きな組織に安住できないのが今西の学問の特長であり、よく云われるフロンティア精神である。大組織にそむいて孤立を求めるようとする今西の行動が野党的とも反権力的とも見られて、現実には国立大学教授でありあるいは大学学長であったにもかかわらず、反体制派の中からも支持者を得ているのであろう。そうして現在のいわゆる“今西進化論”をめぐる論議の中には、このような事情も色濃く反映しているのである。今西学説あるいは今西学派を考えるとき、まずその現実の姿を見つめてゆくことが重要であろう。

6 おわりに

最後に、この今西学説あるいは今西学派の問題をさらに検討してゆくにあたって、永年この問題に関心を持ってきたものとして2つの点を指摘しておきたい。ひとつは、ここにのべたように今西学派というものはその中核部分を除いてはかなり漠然としたものであるが、それと一緒にいわゆる京都大学系の生態学の中に、より積極的な“反今西学派”あるいは“非今西学派”があって、それがしばしば同じ京都系の生態学ということで混同されている。もともと個人の独立性と自由を尊重し、そのために集合離散のひんばんな京都の気風の中であるから、同一人が時期によってちがってくるのは当然であるが、学説の形成と発展の中でそれをなるべく正確にとらえる必要がある。第2に、今西グループに深く関与した人たちはいずれも有能な独立した研究者であったから、その中からいくつもの新しいグループが再生産された。第1期のメンバーの中からでてきた岩田久二雄を中心とする岩田グループと、森下正明を中心とする森下グループは、その成立のかたちが非常にちがっているが、それぞれに日本の学界に独自の貢献をしている。今西グループの発展としてのこれらの流れについても、あらためて検討が必要と考える。

文 献（この論文の内容に關係の深いものだけをあげた）

- 1 青山秀夫・阿部行蔵・岡本太郎・南博（編） 人間科学の事典 河出書房 東京 1951
- 2 藤田信勝 学者の森（下） 毎日新聞社 1963
- 3 IMANISHI, K. Mayflies from Japanese Torrents IX. Life Forms and Life Zones of Maifly Nymphs I. Introduction Annotat. Zool. Jap. 17: 23—36 1938
- 4 IMANISHI, K. Mayflies from Japanese Torrents X. Life Forms and Life Zones of Mayfly Nymphs II. Ecological Structure Illustrated by Life Zone Arrangement Mem. Col. Sci. Kyoto Imp. Univ. B. 16: 1—35 1941
- 5 今西錦司 生物の世界 弘文堂 東京 1941

- 6 今西錦司 生物社会の論理 毎日新聞社 東京・大阪 1949
- 7 今西錦司 人間以前の社会 岩波書店 東京 1951
- 8 今西錦司 私の靈長類学 講談社 東京 1976
- 9 今西錦司 ダーウィン論 中央公論社 東京 1977
- 10 今西錦司 主体性の進化論 中央公論社 東京 1980
- 11 今西錦司 自然学の提唱——進化論研究の締めくくりとして—— 季刊人類学 14卷3号 3—18頁
1983
- 12 今西錦司・他 今西錦司座談録 河出書房新社 東京 1973
- 13 今西錦司・他 今西錦司の世界 平凡社 東京 1975
- 14 今西錦司・吉本隆明 ダーウィンを超えて——今西進化論講義 朝日出版社 東京 1978
- 15 今西錦司・柴谷篤弘・米本昌平 進化論も進化する リブロポート 東京 1984
- 16 伊藤嘉昭 生態学の危機(3) 自然 1973年6月号 62—68頁 1973
- 17 岩田久二雄 昆虫学50年 中央公論社 東京
- 18 可兒藤吉 溪流棲昆虫の生態 カゲロフ・トビケラ・カハゲラその他の幼虫に就いて 昆虫 上巻(古川晴男編) 研究社 東京 171—317頁 1944
- 19 可兒藤吉 木曾王瀧川昆虫誌 木曾教育会 木曾福島 1952
- 20 河合雅雄 森林がサルを生んだ、原罪の自然誌 平凡社 東京 1979
- 21 川喜田二郎 発想法 中央公論社 東京 1967
- 22 吉産竜夫 生態学の窓から 河出書房新社 東京 1973
- 23 草柳大蔵 京風“類猿人”・今西錦司 文芸春秋 昭和45年12月号 146—159頁 1970
- 24 枡山政子・他 私にとっての科学 枡山政子対談集 蒼樹書房 東京 1979
- 25 村松繁樹・川喜田二郎 人文地理学入門 ミネルヴァ書房 京都 1951
- 26 小原秀雄 「今西進化論」論——生物界の起源と発展(I)(II) 生物科学 36卷 162—168頁、216—219頁 1984
- 27 大串龍一 水生昆虫の世界 東海大学出版会 東京 1981
- 28 柴谷篤弘 今西進化論批判試論 朝日新聞社 東京 1981
- 29 柴谷篤弘 私にとって科学とは何か 朝日新聞社 東京 1982
- 30 高崎浩幸 今西セミナー「自然の家」からの報告 生物科学 36卷 94—98頁 1984
- 31 德田御稔 生物進化論 日本科学社 京都 1948
- 32 德田御稔 進化・系統分類学(I) 共立出版 東京 1970
- 33 上山春平 (今西:自然学の提唱についての)コメント 季刊人類学 14卷3号 19—25頁 1983
- 34 梅棹忠夫 日本探検 中央公論社 東京 1960
- 35 梅棹忠夫 文明の生態史観 中央公論社 東京 1967
- 36 吉本隆明・寺本英(対談) 「精神の体重」をもった恐竜はどこへ行く ポピュラーサイエンス 4卷3号 6—19頁 1984